

国語

(六〇分)

答えはすべて解答用紙に書き入れること。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお出題の関係上本文を一部改めた部分がある。

最近、将棋や囲碁などの複雑な知能ゲームで、人工知能(AI)が次々とトップのプロ棋士たちを打ち破ったことが話題となった。このAIの棋風について、将棋の羽生善治十九世名人が「面白いことを言っている。それは「AIには恐怖心がない」ということだ。人間同士の対局では、先を完全には読み通せない不安と、その中で自分の読みをどこまで信じられるかという心の強さ、そういった恐怖心との闘いがしばしばドラマを生む。しかし、AIの指す将棋には、当たり前だがそういった人の持つ心理の綾のようなものがない。詰みがある局面では瞬時に指して詰ましにくるし、こちらの強手にも動揺することがなく淡々と指してくる。人間は詰みがあると思っても間違いないか何度も確認してしまうし、自分の陣形が乱れることや、王様が露出することなどには、どこことなく不安を覚えて躊躇する傾向があるが、AIはどんな怖い手でも平気である。

なぜ、AIの差し手には恐怖心が感じられないのだろうか？ その根底には、AIにとっては「自分が見えることが世界のすべて」ということがあるように思う。AIは「自分が想定していない危険」や「自分が間違いを犯す」といった、自分に「見えないリスク」があることを考慮に入れるシステムになっていない。また、局面によっては実際すべての可能性をしらみつぶしに読んでいる。そういった、言うならば「闇」の存在を知ることのないAIの特性が、恐怖心のない指し手につながっているのではないかと思う。

一方、人は「闇」の存在を知っている。自分に見えない「闇」の中に、時にリスクがひそんでいることを知っているのだ。王様が安全地帯にいれば、多少の読み落としがあっても勝負は先が長いが、王様が露出した局面で自分に見えていない相手の好手があれば、ゲームセットである。だから王様が露出することには恐怖心が伴う。そして過去に読み落としで負けたことがあれば、「またやるのではないか」という、経験から来る恐怖もそれに乗せられる。**a**

生物はその長い進化の歴史の中で、生き残る確率をより高めるために、見えないリスク、つまり潜在的な危険を避ける習性を身に付けてきたのだろう。それは恐らく生物のDNAに深く**①**キザまれており、人の恐怖心の根源となっているように思う。人は見えない「闇」の中にリスクを見てしまうのだ。そして、本当は何も見えないその「闇」に、何を見るかは個人の感性や経験次第である。

この「闇」の中にリスクを見てしまうこと、そしてそれが個人の感性によって大きく違うこと自体は、**2**生物の特性として優れたものである。たとえば森の中で新しいキノコを見つけたとしよう。それを食べる人がいなければ、新しい食料は集団にもたらされないし、みんなが食べてしまえば集団ごと絶滅してしまうかもしれない。だから、人類には勇敢な遺伝子も必要なら、リスクに敏感なビビリ遺伝子も必要なのである。ただ、人間社会において、それが少し厄介な問題を引き起こすのは、何かの社会合意を形成しようとすれば、こういった多様な感性を持つ人々の間にある、不確定なリスクに対する異なった感性をすり合わせる必要がでてくることだ。

一般的に言えば、用心に越したことはない。リスクは少なければ少ないほど良いし、真面目な人が真面目に言っていることに、「それはめんどろだから、いい加減でよくないですか？」とは、なかなか言い出しにくい。しかも言えば、大体怒られる。つまりリスク対策は候補のうちの最大値が採用されることになってしまいがちである。しかし、必要以上のリスク対策は、将棋のようなゲームでは間違いなく弱点となるし、実社会でもしばしば問題となる。**b** 一例として、2009年に騒動となった新型インフルエンザ対策の顛末を紹介したい。

冬になると毎年流行するインフルエンザであるが、実はかなり恐ろしい病気で、これが原因となった1918～1919年の「スペイン風邪」は人類史上最悪のパンデミックと呼ばれており、一説では全世界でおよそ4000万人が亡くなったと言われている。カナダ一国が丸々なくなるレベルで、途方もない数字である。**c** スペイン風邪がそこまでの猛威を振るった理由の一つとして、その原因ウイルスが鳥に由来する新型であり、当時の人々がそれに対する十分な免疫を持っていなかったことが考えられている。

2009年の騒動では、それと同じように豚インフルエンザが**②**ヘンイしたと考えられる新型ウイルス(A/H1N1型)が登場した。同年6月にはWHOがパンデミックの発生を意味するフェーズ6宣言をする事態にいたり、「スペイン風邪」の再来かと世界的に大騒ぎとなった。日本でもこの「パンデミック」への対策が連日報道され、新型ウイルスに対するワクチンが緊急輸入された。当初、準備が予定されていたワクチン量は、国内製5400万人分、海外製9900万人分の合わせて約1億5000万人分である。これに使われた国費は約1380億円という莫大なものであった。

国 語

- □ □ □ □
 A こちらのプロジェクトでも毎年約60億円を計画的にどぶに捨てている計算だ。

額が大きくて、どれくらいどぶにお金が落ちているか実感できないが、日本の科学研究のキカン^③となっている科学研究費補助金の総額が年間2000億円にがしであるから、その影響の大きさは推してしるべしである。こうして書いていると、なんてバカなことをしているのだ、という気分にはなってくるが、スペイン風邪のような深刻なパンデミックが新型インフルエンザで今後起きる確率は、科学的な見地からは無視できないものと言わざるを得ない。結局、起こらなかったから無駄にはなっているが、もしパンデミックが起こり日本で数万人あるいは数十万人規模の死者が出れば、どうして予見できていたのにその対策をしなかったのだ、という非難が湧き起こることは必定である。つまりこれが「リスクに備える」ということであり、眩暈^{めまい}がするほどコストがかかる。

ここからくる結論は一つ。「リスクはゼロにできない」ということである。当たり前と言えど当たり前だが、結局のところ、私たちは「リスクとともに生きる」、言葉を変えれば、「運が悪ければ死ぬ」という道しか選択肢^{せんたくし}がない。良いも悪いもなく、我々に必要なのは「リスクはゼロにできない」という認識と覚悟^{かくご}であり、それを踏まえた上での選択なのである。d

その「ゼロにできないリスク」を前に、勇敢な遺伝子を持つ人たちは、怯えて立ち止まるより、ベネフィットが期待できるのなら、とりあえずやってみるという選択をしてきた。人類の歴史を振り返れば、我々の祖先による様々な挑戦^{ちようせん}により、科学も社会も発展を遂げてきたことが分かる。

また、もつと身近で、現在進行形の例を挙げれば、自動車の問題もある。

実は我々の身近にあるリスクの中で最大のものは、飛行機事故でも、地震・台風でもなく、交通事故である。実際これはかなり深刻なもので、直近の50年間で日本において約50万人の方が交通事故により亡くなっている。この累積数^{るいせきすう}で大雑把^{おおざっぱ}に計算すれば、この50年を生きた日本人のおおよそ200人に一人は車の事故で亡くなっていることになる。驚くべき高いリスク率だ。人類が自動車という技術に手を出さなければ、この50万人の人は亡くならずに済んだはずだが、車の持つリベン性^④、つまりベネフィットを利用することを我々は選んだのだ。そして、数々のヒゲキ^⑤を経験しながらも、少しずつ車の性能向上や交通ルールの改正といったリスク対策を重ねた結果、交通事故による年間死亡者数は1970年の1万6765人をピークとして、近年では4000人程度にまで減少してきている。今後、自動車の自動運転などの技術が進歩すれば、この数はさらに減っていく可能性もあるだろう。リスクを前に立ち止まるのは、生物進化の様式にも似て、人類社会が新しい技術を取り入れるやり方として優れたものであったことは間違いない。

「恐れ」が過剰な対策や無駄なコストを招いているとか、リスクを恐れず踏み込まなければ、何かを成し遂げることなどできないといった指摘は真実だろう。e 確かに生物はそうやって進化してきたのだ。しかし、その生物の進化の中でどうして「恐れ」のよなものを受け継がれてきたのか、少し立ち止まって考える必要のある問題も、また存在するのではないかと思う。それはAIとは違い、「闇」の存在を知る我々生き物に、リスクとともに生き続けなければならない我々生き物に、幾億^{いくおく}の時を越え、ずっと受け継がれてきた³ 貴い智慧^{ちゐ}ではないのだろうか。

(中屋敷均『科学と非科学その正体を探る』)

【語注】

- (注1) 棋士 …… 将棋や囲碁を職業とする人。
 (注2) 棋風 …… 棋士それぞれの個性によって異なる、囲碁・将棋の試合の仕方のこと。
 (注3) 潜在的 …… 外面にははつきり現れず、内面に存在する様子。
 (注4) ベネフィット …… 人や社会が幸福になるための利益のこと。

問一 部①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。かい書で、丁寧に書くこと。

問二 部1「面白いこと」とありますが、この本文における「面白い」とはどういうことですか。六十字以内で説明しなさい。

国語

問三 次の一文が本文から抜け落ちています。この一文が入るのに最もふさわしいところを、本文中の [a]～[e] の中から記号で答えなさい。

それはリスク対策には相応のコストがかかるからだ。

問四 部2「生物の特性として優れたもの」とありますが、なぜそのように言えるのですか。その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 潜在的な危険を避けるという習性が個人の経験によって異なることで、人によって危険の捉え方に違いが生まれ、人間は集団として生き残っていくことが可能になるから。
- イ 潜在的な危険を避けるという習性が個人の経験によって異なることで、人の個性は生まれ、人間はその個性を活かしながら社会合意を形成しようとするようになるから。
- ウ 潜在的な危険を避けるという習性が個人の経験によって異なることで、人々の間に生まれる、不確定なリスクに対する感じ方のすり合わせを行う必要がでてくるから。
- エ 予想できない事象に対する不安が個人の経験によって異なることで、自分が想定していない危険への恐怖心がなくなり、AIのような能力を持つことができるから。
- オ 予想できない事象に対する不安が個人の経験によって異なることで、人間は生き残るために、より優れた遺伝子だけを受け継いでいくことができるようになるから。

問五 本文中の [A] の前と後にそれぞれ二つの文が入ります。あとのア～エの文を正しい順番に並びかえ、文章を完成させなさい。

- ア これはA/H5N1型ウイルスに対するワクチンをパンデミックに備えて1000万人分備蓄しておくという計画で、現在では毎年期限の切れた約1000万人分のワクチンを捨てることになっている。
- イ これに加えて、タミフルやリレンザといったインフルエンザ対策の薬も備蓄されている。
- ウ しかし、この新型インフルエンザは確かに大規模に流行したが、実際には弱毒型であることが徐々に明らかとなり、結局、通常の季節H5N1型だという主張があり、これに対する対策も2006年から続けられている。
- エ こちらも有効期限を延ばして10年にしたが、結局、2016年から毎年約1000万人分(約150億円相当)の薬を廃棄する事態となっている。

問六 本文中 [B] には前文で示された内容の具体例が入る。その具体例として適切ではないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア オットー・リリエンタールはハンググライダーを使って飛行実験をし、初期航空工学の発展に貢献した。
- イ エドワード・ジェンナーは人体実験を行うことで安全性の高い天然痘ワクチンを開発することができた。
- ウ 発酵した煮豆は食べてみるとおいしかったことから人々の間に広まり、今も納豆として食べられている。
- エ 黒部ダム水力発電開発は、困難な作業であったが、深刻な電力不足を解消するためにやり遂げられた。
- オ トリアージは医療技術が進歩する中で、治療の順番を決定するための新たな方法として生み出された。

問七 部3「貴い智慧」とありますが、ここでの「貴い智慧」とはどういうことですか。「貴い智慧」の内容を明らかにしつつ、その内容を八十字以内で説明しなさい。

国語

二

次の文章を読んで以下の問いに答えなさい。なお出題の関係上本文を一部改めた部分がある。

「お父さん、今しあわせ？」私は突然こう聞かれてちょっと返事に困ったものだ。現在はすでに成人の年齢を二、三年も過ぎて会社勤めしている次男が小学生のころ、ときどき私に向かってした質問だった。子供から改まった口調で「今、しあわせ？」と聞かれてみて、私は多少の狼狽がなかったとは言いきれなかったことを覚えている。私はもちろんその都度「そりや、しあわせだよ」とか「しあわせだと思っているよ」などと返事をしたものだが、聞かれてみてすらすらと答えたわけではない。意表をつかれて一瞬ながら返答に戸惑ったのはたしかだ。別に今自分がとても不幸だなどとは思っていないくとも、「今しあわせ？」と正直な子供の目で見つめられると、果たして幸福とは何だろうと思ってしまうのだった。子供の心の中でもまん然とながら、幸福とはどういう状態のものなのかは分かっている、それで身近な父親に向かって聞いたにちがいない。私は聞かれるたびに「しあわせだよ」とは言ったものの一体幸福とは何だろうと思った。

『広辞苑』を見たら、幸福とはみちたりた状態にあつて、しあわせだと感ずること、このように載っていた。幸福感とは多分に精神的な安らぎが基本にあつてこそ生まれるものであろう。私は、幸福と不幸は表裏一体のようなものだと思っている。幸福と不幸は常に私たちの内に同居しているもので手を取り合っているのだ。「お父さん、今しあわせ？」と聞かれて「しあわせだよ」と私が言うと次男は安心したような顔をした。そしてふたたび聞いてきた。「お父さん、しあわせってのはどこから来るの？」そうか、幸福ってのは人の目には分からないような山の向こう側とか遠い空のかなた彼方に住んでいて、ときどき私たちの所に訪ねてくるものなのかもしれない。彼はそう思っていたにちがいなかった。いや、それとも幸福は山や谷や森とか林の中に住んでいて、人々はそれを探しに行くものだと思っていたかもしれない。私はこの質問にも少々虚をつかれた形だった。幼いころだった。朝早く太陽が東の山並みの上に昇って、次第に田畑や家々の屋根を光らせて輝きはじめるのを見ながら、私は太陽はあの山よりずっと向こうに住んでいると思ったものだ。夕暮れに、西の山の端に太陽が姿を落とすのは、きっと、住んでいる国に帰るためだと思っていた。「しあわせはどこから来るの？」こう聞かれたとき、私は太陽の住んでいる国が山の向こうの遠い所にあると信じていたころを反射的に思い出していた。(a)彼も、しあわせはどこかに住んでいて、そして風のようにやってくるにちがいないと思っていたかもしれない。

私はうなずいてみせた。そして彼に対してというよりも自分自身に言い聞かせるようにしゃべっていた。「しあわせってものは大きさとか形とか重さに現すことはできない。あくまでも自分自身のお腹の中や頭や胸の中で音もたてないで生きているものかもしれないね。それに気づくかどうかは一人一人違うだろうね。しかし、しあわせはどこかに住んでいると思ったり、一生けん命頑張って仕事をしたり勉強したりしていると、いつかはきっとしあわせがお前を訪ねてくると信じていることは大切だし、いいことだ。それと共にしあわせは(b)探し出すものであり、つくりだすものだと前向きに思考を変えてみるのも必要だ。誠実に努力を続けていけば、結果として幸福はお前の所に近づいてくるだろう」

小学校低学年の彼に対しては少し難しい言い回しだったかもしれないが、私は一気にしゃべってしまった。彼は次第に成長するにつれて「お父さん、今しあわせ？」こうした聞き方はもうしなくなった。もし彼が中学生か高校生になっても「お父さんは今しあわせかい？」と同じようにたずねてきたなら私はきつとこのように言うだろうと思っている。

「しあわせの意味はね、その人が何度も悲しい思いをしたり淋しくって泣いたり、つまり不幸を痛いほど経験して、ようやく分かることだと思うよ。つまり人は不幸を知らなければほんとうのしあわせ感はず覚できないかもしれないね。不幸は突然襲ってくるが、幸福はめったに唐突に訪れはしない。お前が小学生のころ、たびたび、「お父さんは今しあわせ？」と聞いたものだ。私はいつも『ああ、しあわせだよ』と言ったのを覚えているだろう。そう、私はね、お前が思っている以上にいろんな不幸を経験して生きてきたから、しあわせってこともよく分かっていたからだ。そうだ、『お父さん今しあわせ?』そして「しあわせってどこに住んでいるの?」こうした質問ができる純粋なお前が目の前にいるだけで、私はほんとうにしあわせだと思ったのだよ。『しあわせってのはどこから来るの?』私は²あんなに夢のこともったお前の言葉を聞いて、それでしあわせだと思ったのだよ」

そして、さらに大人になった彼が、もう^①テれくさくて言えないだろうが、仮にだ、「おやじ、今しあわせか」少々クチヨウに変化はあってもいたわるようにたずねたなら、私は(c)「俺はしあわせさ」と言うだろう。そして昔あった話を彼にするだろう。

昔あった話の年代は正確に特定はできないが、その日はよく覚えている。十二月三十一日だった。一年の最後の日だ。積雪はせい

国語

ぜい三十センチほどだったが吹きだまりは一メートルくらいに達していた。山小屋から見れば、北の空の向こうに横一線にひろげているのは美ヶ原である。その美ヶ原の広大な山腹と麓をうづめる原始林や、ゾウキの林の中からは、一筋、二筋と白い煙が立ち昇っていた。例年、雪が降るころから林に入って、薪を伐りだしたり炭を焼いたりする人たちのものだ。

私は毎年のことだが、そうした山仕事の煙が深い森や林の中から昇っているのを見て様々に想像したものだ。あの人たちは大晦日も里に下りないのだろうか。家には帰らないのだろうかと思った。その寝泊まりしている林の中の飯の小屋の様子はどんなものかと思った。

林からの煙を見ながら勝手にその煙の主がどんな人かと思ったりしながら、私は水場と山小屋の間を何回も往復していた。これで終わりにしようかと最後の水を担いで、踏み固められた雪の急坂を登りきったときだった。私は (d) 視界に入った二人の人影を見つけて立ち止まった。

車山乗越の上の空間に、大人と小さな子供らしい影が浮かぶように見えた。私はちよつといぶかしく思った。なんとなく不自然な雰囲気を感じたからだ。私は一気に水を運び上げてから空身になって、ふたたび山小屋の外に立って目を凝らした。乗越の売店は廃屋になっていたが、二人はその中に入ろうとしている風にも見えたし、その付近を歩くでもなければ動くこともないような、何かためらいながら立ち止まったり、のろのろと歩いたりしていた。それは雪に足をとられていたためかもしれないが、私の山小屋の方に向かってきそうな足どりをしたかと思うとまた引き返すようにも見えた。大人のほうは短い棒のように見える物を手に持っていた。私は猟銃ではないかと思った。この暮れも押しつまった日の夕暮れに、子供を連れてウサギ狩りでもあるまいと思った。

私は山靴に履き直してスパッツをつけ、ウインドヤッケを着た。革の手袋を握りしめて乗越に急いだ。何かただならぬものを感じて [X] を貸さなければいけないと思ったからだ。吹きだまりの雪は私の腰のあたりをうづめるほど深く重かった。私は少し汗ばみながら廃屋にたどりついた。わずか十五平方メートルほどのその中はぎつしりと干し草の束が積み込まれていた。おそらく秋のうちに麓に運び下ろせなかったものだ。乾草と同じように、板壁の割れ目や破れた屋根から吹きつけた雪が山のように積もっていた。その中に二人は、ハウシンした面持ちでうずくまっていた。

中年の男と、小学校一年ほどの男の子だった。猟銃のように見えたのは子供のスキーだった。昨夜は白樺湖の旅館に泊まり、子供にスキーを楽しませて今日は昼過ぎに車山を目ざして登りはじめた。思わぬ深い雪に進路を阻まれて、ようやく乗越に着いたときにはすでに夕暮れが迫っていた。遠くに山小屋が見えた。煙を見て人がすんでいると思った。子供をせきたてて何とか山小屋まで行きたいと思った。雪はさらに深くくなって歩けなくなった。空腹に加えて手も足も凍りついて子供は泣きだした。

男は大体このような内容を私に話した。その間、子供は泣きじゃくっていた。「自殺行為じゃないか」、私はそう言って二人を押し出すように促して外に出た。日が落ちて暗くなった空に風が音を立てていた。私は子供を背負って先頭に立ち、雪を押し分けて山小屋に帰った。

子供の顔は寒さのために蒼白になっていた。二人の手足は感覚がなかった。私は二人をストーブの火にあたらせながら、温かい味噌汁を飲ませた。二人は飢えた犬のように二杯目も一気に飲み干した。男の目に大粒の泪が光って流れた。「たすかりました。ありがとうございます」と言いつつ男は顔を拭いて頭を下げた。

二人の身体からは温かい湯気が陽炎のように立った。顔に生気が戻り、目にも輝きが出てきた。あのまま、あの壊れかかった建物の中で夜を過ごすことはできなかっただろう。凍死は激しい睡魔から始まる。寒気と疲労と苦痛の末に死は甘い眠りを伴って訪れるのだ。二人の影が私の目に止まらなかったなら、この親子は明日の朝の太陽を永久に見なかったかもしれない。私は深い安堵感にひたっていた。少々おかげさかもしれないが私は二人を護ることができた、危機から救うことができたと思った。私は 3 心の中にわく満足感が、次第に快いしあわせな気分に変わってゆくのを覚えていた。

翌日の朝、親子は元氣になって山を下りていった。しかし、なぜか男の後姿に暗いかげりが付いているように私には見えた。年末年始にかけて、男親と子供だけの旅が普通ではないように思えた。子供の母は家にいるのだろうかと思った。冬の山を訪れるには、あまりにもケイソウで持ち物の少ないのも妙に気にかかった。ひよつとしたら、男は深い事情を背負って子供を連れ、山に死に場所を求めてやってきたのではないかと私は思わずにいらなかった。

それから永い年月が経った。4 すでに、冬になつても、遠い林の中から立ち昇る煙も見えなくなった。私はある年の春、立派な体躯をした一人の青年の訪問を受けた。十二月三十一日の夜の雪原を私の背に負われて泣いていた、あの男の子だった。「あのとき、お世話になった者です」と挨拶されて、ようやく思い出した。

国語

「いつも忘れたことはありませんでした。あの日のことは毎日思い出しております。(e) 今日はおじさんに会えました」青年はそう言って目を伏せた。私にしみじみとした感動が湧いてきた。いつもあの日を忘れなかったと言う青年の気持ちがうれしかった。

「お父さんは元気かい？」私がたずねると青年はうなずいてみせた。

「父は、今は母といっしょに暮しています。あのころ父は苦しんでいました。仕事にもゆきづまって絶望的な状態だったのです。そうしたことは大人になってから父から聞きました。たぶんあの日、おじさんに会えなかったら、父も僕も死んでいたでしょう。父はそれを覚悟して僕を山に連れてきたのです。今では、父は生きてきてよかったと言っています。実は今日は父にだまって出てきました。今度父と母をここに連れてくるつもりですので、その案内ができるようにこれからあの日に歩いた所を一人で行ってみます」青年を送り出しながら、私はしあわせな快感に酔っていた。青年の後姿にもしあわせが光っているように見えた。あの青年は、もう充分に真のしあわせの価値を知っているのだ。もしあの青年が父に向かつて「おやじ、今しあわせかい？」と聞いたとしたら、私の山小屋の火の横で大粒の涙を流していたあの男もちょっととれながら「5しあわせにきまっているさ」と答えるにちがいない、私はそんな想像を続けながら青年が小さくなっていく道を目で追っていた。

(手塚宗求『幸せな風景』)

【語注】

- (注1) 山小屋 …… 当時筆者は長野県の白樺湖と車山乗越の中間にある山小屋に一人で住んでいた。
- (注2) 水場 …… 飲み水の確保できる場所。
- (注3) 空身 …… ものを一つも持たず身軽なこと。
- (注4) スパッツ …… くつの上部につける短いおおい。
- (注5) ウインドヤッケ …… 登山用のフード付きの上着。ウインドブレーカー。
- (注6) 体躯 …… 体つき。体格。

問一 部①～⑤のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。かい書で、丁寧を書くこと。

問二 部A～Cの語句の本文中の意味として最もふさわしいものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A 「意表をつかれて」

- ア 人に知られたくないことを指摘されて
- イ 自分の考えとは異なる意見を言われて
- ウ 都合の悪いことをするようお願いされて
- エ 期待外れの行為にがっかりしてしまって
- オ まったく予想していなかった質問をされて

B 「いぶかしく思った」

- ア 二人が迷っているように見えて内心あわてた
- イ 二人の様子に納得がいかず確認したくなった
- ウ 二人の冬山にふさわしくない行動にいらだった
- エ 二人がそう難しているのではないかと不安だった
- オ 二人の影が浮かぶげん想的な光景に現実感を失った

C 「せきたてて」

- ア 早くするように急がせて
- イ もたもたするなと責めて
- ウ 到着できるように背負って
- エ もう大丈夫だと安心させて
- オ あきらめるなとはげまして

国語

問三 (a) (e) に入る語としてふさわしいものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上用いてはいけません。

ア ふっと イ かなり ウ やっと エ むしろ オ おそらく カ やはり

問四 部1「幸福と不幸は表裏一体のようなものだ」とありますが、どういうことですか。五十字以内で説明しなさい。

問五 部2「あんなに夢のこもったお前の言葉」とありますが、なぜ次男の言葉は「夢のこもった」言葉だと筆者は感じたのですか。その理由として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア まだあどけない幼少のころに、悲しい思いをしたり淋しくって泣いたりする人生の不幸を経験せずにすんだ次男のことをとてもしあわせに思えたから。

イ まっすぐに質問ができる次男を見ていると、彼が何事も前向きに考えてへこたれない強い人間に成長できると確信して、その将来が楽しみになったから。

ウ 「しあわせってどこから来るの?」と、まるで生き物のように想像する次男の無邪気さに子育てする親のしあわせを感じ、次男をいとおしく思ったから。

エ 次男は今がしあわせだとなんとなく感じており、それなら父親もしあわせであって欲しいと願う父をいたわる子供の心づかいにしあわせを感じたから。

オ 次男に説明する中で、しあわせは消えたりせず必ずどこかにあって努力を続ければしあわせになれるのだという前向きな考えに気づかせてもらえたから。

問六 「X」を貸さなければいけない」の「X」に体に関係する語を漢字で入れて、慣用表現を完成させなさい。

問七 部3「心の中にわく満足感が、次第に快いしあわせな気分が変わってゆく」とありますが、このときの筆者の気持ちの説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 父親の行動によって危うく命を落とすところであったことに反省を求めたが、父親も自分の行いを深く後かいしており、このようなことは二度と起こらないと確信している。

イ そう難していた親子を助けることに夢中であつたが、自分のとつた行動によって親子の命を救い、親子の明日からの未来を護ることができた喜びをしみじみと実感している。

ウ 死に場所を求めて山に入った親子を思いとどまらせたことに満足し、自分のおかげで親子に生きる喜びを与えられたことに感謝して欲しいという気持ちになっていた。

エ 自分が親子の姿を見かけて助けることができたことと親子がああ廃屋に避難できたことがともにぐう然の奇跡であり、その不思議なつながりに感謝している。

オ 山深い冬山の中一歩間違えれば死ぬかもしれない状況の中で親子を助けたことで、ふだん気づかない今生きているという当たり前のことが本当のしあわせだと気づいた。

問八 部4「すでに、冬になっても、遠い林の中から立ち昇る煙も見えなくなった」とありますが、この状況の説明として最もふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 季節が移り変わって、山奥で作業をする人たちも町の家で暮すようになった。

イ 少子化の時代となり、山奥の田舎で暮す人が減りこの地域の過疎化が進んだ。

ウ 科学技術が進歩して、山小屋に電気が通って薪で暖をとる必要がなくなった。

エ エネルギー革命が起こり、炭を使う人が減り炭を焼く人たちが少なくなった。

オ 筆者が年を重ねて目が見えにくくなり、遠くに昇る白い煙が見えなくなった。

問九 部5「しあわせにきまっているさ」と答えるにちがいない」とありますが、そのように判断した筆者の考えを、なにが「しあわせ」なのか具体的に示しながら、本文全体をふまえて七十字以内で説明しなさい。

国語解答用紙

受験番号	氏名

※の欄には何も書かないこと

一											
問七				問六	問五	問三	問二			問一	
					☐	問四				①	
					☐					②	
					A						
					☐						
					☐					③	
								④			
									⑤		
											※

二												
問九				問五	問四			問三	問二	問一		
				問六				a	A	①		
								b	B	②		
											c	C
												問七
e												
	⑤											
		※										

※